

● 大谷 由香 特定准教授

Yuka OTANI (Associate Professor)



研究課題：中世日本仏教における戒律実践の実態とその根拠となる思想の考察

(Research on the Mahāyāna practice of precepts and the thought thereof in Medieval Japanese Buddhism)

専門分野：東アジア仏教学、戒律解釈史

(East Asian Buddhist studies, History of interpretation of Buddhist precepts)

受入先部局：人文科学研究所 (Institute for Research in Humanities)

前職の機関名：龍谷大学 (Ryukoku University)

紀元前5世紀頃、インドに活躍した仏教の開祖・釈尊は、家庭も仕事も捨てた出家修行者たちが共同生活を営むためのルール(律)を作成しました。さらに釈尊の死後500年を過ぎた頃に勃興した大乘仏教ムーブメントの中で、慈悲に生きた釈尊の前世の姿に注目が集まり、前世の彼と同じように生きる指針として、菩薩戒が提唱されます。それらが示された仏典は東アジアで漢訳され、仏教徒が遵守すべき「戒律」として弘まっていきました。ブツダが定めた「戒律」は改変厳禁です。しかし時代も土地も文化も異なる東アジアの国々で、仏典が成立した時代のインドと同じ生活様式を再現することは不可能です。人間としての営みと宗教上の理想との葛藤の中から導き出された仏教徒としての生き方は、戒律の注釈という形で残されています。私はこれらの戒律注釈文献を読み解くことで、その時代・地域での仏教実践のあり方を明らかにしたいと考えています。本研究では、特に中世の日本の僧侶たちに焦点を当て、「破戒」と呼ばれてきた行為の背景にある戒律理解を探ります。

Around the 5th century B.C., Śākyamuni Buddha as the founder of Buddhism created monastic rules (the Vinaya) for his disciples who had abandoned family and secular work to regulate their communal life in India. The Mahāyāna movement, emerged about 500 years after the Buddha's nirvana, emphasized the Buddha's previous lives of continued compassionate practice as a bodhisattva and promoted the bodhisattva precepts as guidelines for living like the Buddhas. Therefore, East Asian Buddhism did not distinguish between the Vinaya and the Bodhisattva precepts, but translated them into one term in Chinese: "jīelǜ 戒律" (the Vinaya and bodhisattva precepts). In other words, East Asian Buddhism advocated that both the Precepts and the Vinaya should be observed. The "jīelǜ" established by the Buddha are strictly forbidden to be altered. However, given different periods, regions and cultures in East Asian countries, it is impossible to replicate the exact same lifestyle as that of India during the period when the Buddhist scriptures were established with. The way of life as the Buddhist derived from the tension between human behavior and religious ideals remains in the form of commentary on the precepts. The aim of my study is to provide interpretation on the Buddhist practices of a certain historical period and region by examining these commentaries. This project aims to investigate the principles behind the concept of "breaking the precepts" with a specific focus on medieval Japanese Buddhist monasticism.

日本仏教は「墮落」なのか

仏教の開祖・釈尊が、出家修行者の性交渉や殺害行為を禁じていることはよく知られています。一方中世の日本では、僧侶たちが「女犯」して実子に寺院を相続し、自ら武器を手に執り「僧兵」として殺人行為にさえも加担しました。釈尊とその弟子たちの修行生活の実態からみたとき、こうした日本仏教の実態は仏教研究者たちによって墮落・退廃あるいは敗北であると評されてきました。

しかし日本の僧侶は、決して戒律を蔑ろにしてきたわけではありません。日本に仏教が導入されたときから、国内においても連綿と戒律研究が続けられていたことは、現存する多くの戒律に関する注釈書や解説書の存在から明らかです。しかしこれらの戒律関係文献の内容は、これまでほとんど顧みられることがありませんでした。なぜ「破戒」と呼ばれる行動を、日本の僧侶は堂々として行ったのか、残された戒律関係文献にはそのヒントが示されているはずです。

戒律注釈文献が開く可能性

ブツダが制定した戒律に基づく生活を、時代も環境も違う日本の僧侶が文字通りに再現することは不可能です。このため戒律は注釈・解釈される必要がありました。彼らの時代や地域環境に合わせて「仏はこのように仰っているがこれは例外だから許されるのではないか」、あるいは「仏の発言の本意はこういうことなのではないだろうか」という注釈無くして、後世の他地域の人々が仏道実践することはできないのです。戒律文献の注釈は、いわばその時代をその地域で生きる人々が仏教を実践していくための知恵の結晶といえるでしょう。本研究では、特に日本で作成された戒律教義に関する注釈文献をもとに、中世日本の学僧たちが、何を問題とし、どう解消しようとしたのかを明らかにしていきます。私はこれまでも寺院調査を通じて学会未見の史料を検出・紹介してきた実績があります。この研究でもそれらの新出文献を利用して、これまで知られてこなかった日本仏教のあり方を紹介していきます。

またこの研究では、あらゆる史料を分け隔てなく活用し、思想の具現化がどのように行われ、周囲にどのように受け止められたのかを確認することで、当時の僧侶の実態を立体的に復元していきたいと考えています。たとえば当時の儀式法具や袈裟、建造物などの遺物は、当時の僧侶の生活実態を示すものであり重要です。文学作品や歴史文献、美術作品に描かれる僧侶の姿は、彼らが周囲からどのように認識されていたのかを示す資料として活用できます。これら他分野領域の研究資料とされてきたもの、あるいはその研究成果を活用して中世日本仏教全体の概観を明らかにしていきます。

中世の日本仏教の特殊性

中世の日本は、戒律復興がさかんに叫ばれた時代でもあります。そのような機運の中で、僧侶の妻帯や武装化が隠されることなく行われていたこと背景には、それを正当化できるだけの教学研究成果があったはずで、特に東アジアでは、大乘仏典に説かれる菩薩戒が生き方の指針として重要視されてきました。大乘仏典には、衆生救済のための殺人行為を菩薩戒の実践であると讃歎するもの（『瑜伽師地論』菩薩地・『撰大乘論』など）や、釈尊自身が仏教擁護のために武器を手に執り殺人行為に加担した過去世を持つことを提示するもの（『涅槃経』『大宝積経』など）が存在しています。これらの言説を日本仏教がどこまで戒律実践の実例として受け入れていたのか検討していきたいと思っています。

また鎌倉時代には、日本と中国の間で仏教交流が盛んに行われており、日本独自の戒律理解が中国仏教に影響を与えたり、また中国での僧院生活規則が日本に導入されたりしていたことがわかっています。東アジア全域で交流的に戒律研究・実践が行われたことを踏まえたとき、日本中世の僧侶の破戒行動を日本仏教のみにみられる特異なあり方と断定することの妥当性は再検討される必要があるでしょう。中世日本の仏教実践を明らかにすることは、波及的に東アジア全体で指向された理想的菩薩のあり方を浮き彫りにすることにつながると考えています。



図1：延暦寺衆徒三塔僉議（天狗草紙延暦寺巻・部分）
小松茂美編『土蜘蛛草子・天狗草紙・大江山絵詞』
（続日本絵巻大成 19、中央公論社、1984）21頁より引用



図2：妻と添い寝する紀伊寺主（春日権現験記絵）
小松茂美編『春日権現験記絵』下
（続日本絵巻大成 15、中央公論社、1982）13頁より引用

参考文献

- 大谷由香「僧兵と不殺生」『歴史学研究』1040（2023.10）、2023
- 大谷由香「越境する戒律問答」公益財団法人仏教美術研究上野記念財団研究報告書48『日本における梵網経と菩薩戒思想の問題』、2022
- 大谷由香「東アジアにおける二百五十戒の実践—新出資料・元照撰『撰戒種類図』を通じて」木俣元一・近本謙介編『宗教遺産テキスト学の創成』勉誠出版、2022